



チャイの誘惑

麻生玲子:著
羽田共見:画

ジンジャーの誘惑

《立読み版》

麻生 玲子

イラスト 羽田 共見

散々な日だ、と須田翔月すだかづきは思う。男にはメール一本で振られ、静かに飲もうと入った店のすぐ近くの席では合コンが開かれ、ざわめきと嬌声が聞こえてくる……。

七月に入ったばかりだが、昼間の気温はうなぎ登りだ。都会のアスファルトは熱をため込み、夜に吐き出す。勢い、気温が下がらない。店内だけが天国のようだ。

にもかかわらず、快適なのは気温だけだった。いや、料理も肴さかなもうまい。しかし、いつもとは雰囲気さかなが違った。

この店には、何度か来たことがあった。若者が大人数で来るような店ではない。落ち着いた雰囲気さかなで、静かに酒と肴を楽しむ店だ。少なくとも、数カ月前に来たときはそうだった。

だが、背伸びをしたい年頃の若者が、いいところをと物色でもしたのだろう。世知辛い世の中だ。飲食店も、客を選んでいられないということもあるのかもしれない。

早々に出てしまったかったが、せっかく入ったこの店を、他人のせいで出て行かなくてはならないというのも癪に障る。あと少しだけと、ギリギリまで粘ろうとした。

「俺は右の子」

「あ、じゃあ重ならなくて丁度いいか」

「つていうか、あの子たち『超』と『マジ』と『ヤバイ』しか言っていないし」

そう言つて笑う彼らを、須田は心の中で囓^{わら}う。

——いや、お前等だつてそうだろうがよ。

心の中で突っ込みを入れる。トイレの中での会話だ。彼らは、トイレでさえ静かにしてくれないのだ。

「つか、柳瀬^{やなせ}は？ あいつ、席外しすぎ」

「外で電話でもしてるんじゃないの？」

女子でもあるまいし、浮かれた彼らはずいぶんと声音も高い。

「あ、うんこじゃね」

「あー、そうできつと。あそこだ！」

先程から閉じたままの個室を指さして、一人が笑う。まるで小学生のように『うんこ』を連呼する彼らにあきれた須田の前で、彼らは声を張り上げた。

「柳瀬え、早く出てこないと、一番面倒くさそうなのお前に割り振っちゃうぞ〜」

ギヤハハと下品な笑いを残して、彼らは出て行った。ようやく静かになったところで手を洗い、丁寧に眼鏡の曇りを拭^{ぬぐ}って装着し直す。

しばらくして、件^{くだん}の人間だろうか、背の高い男が個室からのそりと出てきた。

水を流す音もしなかったので、気分でも悪くて休んでいたのかと鏡越しに顔色を窺ってみるが、彼はケロリとした様子だ。

手を洗いながら、ふと彼が顔を上げた。そして、鏡の中でバチリと視線が合う。すると彼は意外なことに、須田に笑顔を寄越した。

「俺等、うるさいでしょ。迷惑かけてすみません」

ペコリと頭を下げた。多分、先程の会話の中のヤナセ君だ。

他の面々とは違って、ずいぶんときちんとした様子だ。特に酔っている感じでもない。

店内での話が時々聞こえてきていた。内容から推定すると彼らは大学生のようだが、この男は他の輩^{やから}とは少し雰囲気が違う。年齢より大人びているようにも思える。

「多分、もう少しで出ますんで」

「……うんこ？」

思わず訊いた須田に、彼がプハッと吹き出した。

「違いますよ。面倒くさいんで、時間つぶしてただけ」

「何もトイレじゃなくても……」

「まあでも、店の外に出てもうるさいし。店内じゃみつかるし」

確かに、落ち着いた店とはいえ、実のところ繁華街のど真ん中にある。この時間は、会社帰りのサラリーマンを呼び込む声もにぎやかだろう。

店内での様子があまりにもうるさかったので、実のところ須田は、チラチラと彼らの様子をうかがっていたのだ。その中で唯一、大騒ぎをしていなかったのが彼であり、どうやら女子が狙っている第一候補も彼ようだった。

じゃ、と言って席に戻っていった彼の背中を見送って、自分も慌ててドアに向かう。こんなにトイレに長居をするつもりじゃなかった……。

「まあ、どっちにしても気が削そがれた」

自分に言い聞かせるようにして、席に戻った須田は財布を取り出す。

大して飲んでいないが、多少酔いは回っているかもしれない。本来なら、一人では飲みに行かない方だ。この店だって、一人で来たのは初めてだった。

——結局、誰かと来たことのある店じゃないと、安心して入れないってことだ。

子供でもあるまいし、と心の中で苦笑する。いくつになっても慣れない。一人で生きていく覚悟もできない。

直前に会計を済ませたのだろう、例のグループがぞろぞろと帰っていくのを見た。須田が顔を上げると、先程のヤナセ君と視線がぶつかった。

彼は微笑^{わら}ってペコリと頭を下げた。須田も小さく頷いて返す。もちろん、社交辞令だ。

——人並みに恋愛したいって方が無理か。

須田は、すぐに自分の思いに引き戻される。幼いときからそうだ。自分の考えにがんじがらめになる。そして、いつも後悔している。

自分のマイナス思考を断ちきるように息を吐き出すと、須田はガタンと席を立った。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

ジンジャーの誘惑

《立読み版》

発行日 2011年8月25日

著者名 麻生 玲子

イラスト 羽田 共見

発行所 【MILK-CROWN】
ミルククラウン

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Reiko Asou 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。